

もの言う牧師のエッセー 第221話

「真田丸」

NHK大河ドラマ「真田丸」が始まった。戦国武将の中で最高の人気を誇る真田幸村が主役である上に、ヒットメーカーの三谷幸喜氏が脚本を担当ということで、周囲の期待は膨らむ。しかし、このドラマでは主人公の名前が幸村ではなく、彼の本名である“信繁”となっているように、真田幸村には後年書かれた軍記物語や講談、小説によって脚色されたイメージが多く、猿飛佐助、霧隠才蔵などで有名な真田十勇士もウソである。斯様なイメージが出来上がった背景は、鬱屈した江戸時代に醸成された“反徳川”の雰囲気と、言うまでもなく信州上田城で、天才軍師である父、昌幸と共に、徳川軍に大損害を与えて撃退した2度の籠城戦、さらには大坂冬の陣では家康の誘いを断り大坂方につき勇戦、夏の陣での家康本陣への斬り込み等、後世にまで語り継がれた英雄譚ゆえであろう。

だが、“家康が最も恐れた男”は幸村だけではなく、もう一人いる。後藤又兵衛である。他に先駆けて大坂城に入城後、城の南、玉造口が手薄なのを知り、後に幸村が城外に作った出丸“真田丸”を着想し、最初に工事に掛かったのが実は又兵衛であった。長らく黒田家に仕え、朝鮮の役でも活躍、全身に刀傷が53箇所もある歴戦の猛者である当時56歳の彼は、身長180cmの豪傑タイプでありながら、譜代衆より洗練された物腰と行儀作法により、上は家老から下は浪人に至るまで又兵衛に心酔し、城外天満の地での阅兵式の総指揮官を務めた際には、その采配の見事さから軍神の如く称えられた。

彼は戦場で兵法を学んだが、いっぽう幸村は、14年間に及ぶ高野山の九度山での蟄居中に和漢の軍書を読み漁り、父の軍事知識の一切を吸収、痩せ型の背の低い書斎出身の49歳。そのようなことから司馬遼太郎は、天稟の智将・真田幸村と、千軍万馬の勇将・後藤又兵衛と称えた。対照的な両者。自分の思い通りに行かない時も、敗戦が濃厚となっても、全くブレずに初志貫徹し、共に恩のある豊臣家のために最後まで奮戦し散った二人に対し、今でも多くの日本人は心を熱くする。聖書に登場するきつての英雄で戦いに明け暮れたダビデは、

「正しく歩み、義を行ない、心の中の真実を語る人。その人は、舌をもってそしらず、友人に悪を行なわず、隣人への非難を口にしない。神に捨てられた人を、その目はさげすみ、主を恐れる者を尊ぶ。損になっても、立てた誓いは変えない。」詩篇 15 章 2-4 節、

と言っているが、なるほど日本人にもピンと来る。聖書には彼のような神を愛し、人を愛し、筋を通して生きる“不器用”な英雄が大勢登場する。何と言ってもその筆頭は人類の罪のために十字架にかかったキリストだ。だからこそ、彼は今でも多くの人の心を揺さぶるのである。そして、彼に信頼する者は、人生を見事に戦い抜く。

2016-2-19

